

<ラウンドテーブル報告1>

初年次教育における自己表現教育の可能性 —人間らしさ・芸術性・クリエイティビティーが求められる時代に—

【司会者】 安永 悟 (久留米大学)
【企画者】 谷 美奈 (帝塚山大学)
【話題提供者】 谷 美奈 (帝塚山大学)
横山千晶 (慶應義塾大学)

1. あいさつ 安永 悟 初年次教育の新たな視点の発見

昨年、帝塚山大学で開催された第7回大会の大会企画フォーラム「自己表現：表現から実現へ〈造形〉〈演劇〉〈文章〉」に参加したときの感動はいまでも忘れることができない。そこで報告された3名の実践では、自己表現に取り組んでいる学生たちの活動性の高さに、そして一所懸命に活動する学生たちの豊かな表情に心躍る気持ちで聞き入った。私にとっては、初年次教育の新しい視点との出会いとなった。

フォーラムが終わった直後、企画者であった谷 美奈先生に「この企画、来年度以降も続けませんか。学会の一つの目玉にしませんか」という提案をさせていただいた。その思いにお応えいただき、今回のラウンドテーブルが実現した。

本企画の実施にあたり、谷先生と横山先生による入念な準備と打合せ、および前日からの会場設営が成功の鍵といえる。参加者の反応を予測しながらの入念な打合せや準備は、まさに授業づくりと通底するものがあり、学ぶべき点が多々あった。そして本番。予想通り、本企画は成功裡に終わったといえる。この点は本稿の最後に紹介されている参加者の声からもうかがえる。

昨年はフォーラムに参加して、結果の報告

を理解することに留まったが、今回は参加いただいた皆さんと実際に活動することで、自己表現教育の大きな可能性を、身をもって実感できた。同時に、私の専門である協同教育の観点から、自己表現の可能性をさらに広げることができるのではないかと、仲間と共に自己表現を展開するなかで協同の意義や価値を、より身近なものとして伝えられるのではないかと、そんな期待がますます大きくなった。次年度以降もこの企画をぜひ展開したいと考えている。

2. 企画趣旨 谷 美奈 (1) 今、なぜ、自己表現教育なのか？

現在、自己をさまざまな形で表現することはコミュニケーションの第一歩と考えられており、初年次教育での重要なテーマの一つとみなされている。この課題に対して、多くの大学で対人関係や言語表現、情報活用などでの基本技能育成が積極的に図られている。しかし、これらの教育が、たとえば社会人としての必要な基本技能の訓練といったテクニカルなものに始終するだけでなく、我々の棲みこんでいる世界を自覚し共生を志向していくための基盤づくりを資するためには、より原初的かつ自己省察的な関係吟味や創造性の発揮の機会が必要ではないだろうか。

だが、大学における「自己表現」教育は、

例外はあるものもっぱら数理的科学に依拠した概念や方法が主流となっている。このことは当然、評価方法にも反映している。しかし、それらがなかばア・プリアリな前提と化していることに、大学や教員はどれだけ自覚的だろうか。とりわけ初年次教育の分野では、学生一人一人の個性に対応したカリキュラムや支援手法の開発の可能性を狭めていないかどうか、検証してみるべきだろう。「合理的で、形式的で、予想可能な」方法を優先する社会の風潮に、私たち自身が支配されてはならないからである。そのような教育の可能性やその意義について考えるために、次のような知見を、本ワークショップの前提として提示した。

(2) 人間らしさ・芸術性・クリエイティビティが求められる時代へ

認知心理学者ハワード・ガードナーは、人間の知性は単一ではなく、複数あり、少なくとも8つの知性を持っていると主張している。長所やプロフィールが個人によって違うように、人によってある知能が強かったり、弱かったりするという「多重知能(Multiple Intelligences (=MI))」の理論を発表している。このように、人によって知性が異なるからこそ、数学的・科学的な教育に偏らず、芸術に関しての人間の認知という観点から、芸術的能力の発達、創造性の研究、芸術教育の活動を進める必要があるとしている。現在、このMI理論は、世界各国の教育現場やビジネスの世界でも取り入れられつつある。

このように、認知心理学の立場からも、芸術的能力や創造性に関する教育の必要性が注目されているが、その一方で、イギリスの教育学者ケン・ロビンソンは、学校教育が狭い領域でしか子どもの能力を見ようとしないと指摘し、子どものクリエイティビティを損ねていると警笛を鳴らしている。そして、数学的・科学的思考を高めるための教育と同じように、芸術的感性や人文的教養を養うため

の教育や身体の健全な発達を促す教育にも力を入れる必要があると言っている。日本の教育現場においても、美術や音楽の授業は減る一方にある。

また、アメリカの教育学者キャシー・デビットソンは、2011年に小学校に入学した子どもの65%は、大学卒業後、2011年現在では存在していない職業に就くと予測している。この問題をさらに進めてみるならば、「人工知能社会」の到来が考えられるであろう。

「人間は不要に? “人工知能社会”の行方」と題されたNHK クローズアップ現代の報告(2015/3/3放送)によれば、たとえば人工知能はすでに、記者の仕事である文章作成を膨大なデータを基に担うことが可能になっている。そして、人工知能の研究者は「機械ができる仕事が増えるにつれて、大卒のホワイトカラーの仕事の多くが失われていく」と予測している。人工知能の普及は、雇用を大きく変え、そこで求められる質も変わると見られている。そこでは、人間らしい、あるいはその人独自の判断やよりクリエイティビティの高いものが求められると予測されているのである。

とすれば、これからの大学教育は、こうした変化とどう向き合えばよいのだろうか。ここでは、従来の伝統的な数学的・科学的な教育に加えて、学生一人ひとりの個性や感性を大切に「人間らしさ、芸術性、クリエイティビティ」といったものの開発が求められるようになるであろう。

それは従来のSTEM (Science, technology, engineering, math) という教育スローガンから、STEAM (art) が世界中で強調されつつあることとも一致する。

適切な広がりをもつバランスのとれたカリキュラムと、人間知性による豊かで可塑性に富む表現とそれを正当に評価する教育方法は、たえず前提を疑うことによって編み出されるものと考えられる。

以上のような問題意識から、本ラウンドテーブルでは、自己表現教育のひとつとして、「ドラムサークル」を入り口とした「パーソナル・ライティング」の体験型ワークショップを行った。さらに、パーソナル・ライティングをヒントにした新しい表現教育の実験事例「朗読を通した物語の共有」を体験し、初年次教育における新しい表現教育の可能性を参加者と模索した。

3. 話題提供Ⅰ 谷 美奈 「ドラムサークル」を入り口とした「パーソナル・ライティング」の体験型ワークショップ

「そもそも人間にとって、〈表現する〉とはどういうことなのか?」、「本来、我々が〈言葉にする〉とは、どういった体験だったのか?」。これらの問いを一理屈ではなく、「こころと体で感じる」ワークショップを実施した。

会場はワークショップ形式に、机を排し椅子だけがサークル状に並べられた。参加者には「裸足」—じっくりと体感するために—で参加してもらった。簡単な趣旨説明の後、アイスブレイクとして「シェーカーゲーム」を行った。打楽器の一種である卵形のシェーカーをリズムに合わせて回すゲームであるが、やってみると意外に難しい。ここでは、「そもそもコミュニケーションとはどういうことなのか?」「他者を信頼するとは?」「失敗こそが場を和ませる。気づきになる」といったことが実感された。つぎに、ジャンベ、トーンチャイム、シェーカー、タンバリンなどをつかった「ドラムサークル」を行った。楽器を鳴らすという非日常の経験には、独特の不安と期待、緊張が生まれる。サークルのなかで参加者一人一人が自由に音と音を重ねる。そのような空間で、自己と向き合い自己を発見する、そして、他者と向き合い他者と何かを創り上げる。こころと五感を研ぎ澄ませながら「そもそも自分を表現するとはどういう

ことなのか?」「他者と表現を模索するとはどういうことなのか?」などといったことが体験された。

つぎに、ドラムサークルの経験を引継ぎ、「感覚を描く」といったテーマで自己省察としての文章表現「パーソナル・ライティング」のワークを行った。まず、個々に抱く「感覚」について自由にイメージしたものを子どもの頃に戻った感覚でクレヨンで画用紙に描いた。ついで、その感覚のイメージや体験を言葉でも伝え合い、「〈感覚〉とは、そもそも自分にとってどういう体験か?」といったことを参加者で共有し合った。つぎに、大学初年次生が同じテーマで文章化した「パーソナル・ライティング」の作品(エッセー)を朗読し鑑賞した。大学生になったばかりの一年生が、どのような悩みや不安、期待を抱きこれまで生きてきたのか/生きているのか、学生一人ひとりの実存に迫る〈すがた〉が、サークルのなかで映し出されることとなった。

4. 話題提供Ⅱ 横山千晶 「朗読を通した物語の共有」

「自己を語る」。この行為は初年次の大学生でなくとも、非常に難しい。大学の教育の目的が自律した個人の育成だとすれば、その中で自分を形作ってきたものを振り返るという行為は、客観視された自分との対話であり、自己批判と自己肯定のプロセスであるといえる。そのプロセスを経た後で見出した自己を語る行為は、発見された自己を他者と共有することになる。

「自己を語る」行為は聞き手としての他者の存在を前提とし、同時に物語の共有は「受容」と「共感」を土台としている。しかし、受容の前には疑問もあり、反発も否認もあり得る。異なった経験を受容し、その中で否認や疑問を経ながら受容と共感へと導いていくには、まさに異なった経験を持った人々が語り

を共有する必要がある。慶應義塾大学では通信教育課程で学ぶ年代も経験も多岐にわたる学生たちを擁する。2010年度より通信教育課程の学生たちが集中的にキャンパスで学ぶ夏季スクーリングの期間を利用し、1~2年を中心とした通学生と通信教育課程の学生とがともに履修する夏季集中クラス、「身体知一創造的コミュニケーションと言語力」が開講されている。内容は身体的なワークショップを経て、文学作品のより広い解釈へと導いていくことを目標としている。

2015年度は8月12日から8月17日にわたって集中授業が展開されたが、今回は自己語りと聞き取りを促す媒介として最初に文学作品を使用した。「記憶」と「経験によるエピソード」を描く文学作品は多数あるが、授業ではこれらの記憶と経験の描写を次のいくつかのパターンから選び取った。

1. 五感(音楽, 香り, 味など)から呼びさまされる特定の記憶
2. 人生の最後において振り返る記憶
3. ある経験を分析することから得られる客観的な自己

これらのパターンは「自己語り」のいくつかのフォーミュラを与えてくれる。同時にこれらは切り口に過ぎず、さらにさまざまな自己語りの形式の可能性を示唆するものでもある。

今回のワークショップでは、この「自己語り」と物語の制作」の授業を説明した後で、上の2の例として使用した若手作家のジェニー・ホロウェルの「あなたも含めて何かもの歴史」を輪読した。パートナーをなくし、自らも晩年に差し掛かった人物が今までの人生を走馬灯のように振り返るショート・ストーリーである。30分という限られた時間の中で、解釈のシェアリングや自分の経験と置き換えての自己語りまでは行うことはできず、朗読に終始してしまったが、まずはひとりで朗読する時間を経て、その後輪読、続い

て次の朗読者を選びながらつないでいく朗読と、3回の朗読経験を参加者に味わってもらった。

ここでは、自分と他者の「声」を発見することと、その声と読み方の中に解釈を発見することに主眼が置かれる。他者の声を通じて物語の解釈に新たな光が当てられるのみならず、この人にこの箇所を読んでもらいたいという積極的な他者への働きかけと関係性の構築も短時間の間に見ることができた。

このワークショップに入る前に「ドラム・サークル」と絵による表現、谷氏による「パーソナル・ライティング」の紹介と朗読があらかじめ用意されており、前者で言葉以外の方法で他者とつながる場が構築され、また朗読による深い感動が与えられていたからこそ、短時間の中での「声」を通した物語の発見と共有が可能となったのだと思われる。

5. おわりに 参加者の声

- ・説明や理論でなく、体験することが良かった、言葉がなくとも、あとからその意味や良さがじわじわくる。
- ・頭と体が柔らかくなって、クリエイティブティが持てそうな感じ。
- ・人と輪になる、ということだけでもめったにない体験。そこでのコミュニケーション体験は濃密だった。
- ・自分が本来どんな人間だったのか(どんなことが好きだったのかなど)、忘れていたこと(子どものときは自覚があったけど大人になって頭が固くなっていて忘れていた)を今更ながら再認識できた。
- ・とにかく、まず、裸足になる、ということが本質的です。
- ・ワークショップということ自体どのようなものか知らなかった。深い意味でのアクティブラーニングですね。
- ・学生の作品は涙を流しながら聞き入りました。

た。学生の考えていることがひしひしと伝わってきますね。

- ・学生の作品を読んで、はじめて学生のことが見えるような気がしました。こういうことがないと、教員は学生の表面的なものしか見られてないのかもしれないと思いました。
- ・文章や考えるということは頭からではなく、本来、体や心からくるものだということが、わかり新鮮だった。
- ・これからの時代は、こういったクリエイティビティーの育成が重要だと思いました。私も将来このような研究をしたい(院生)。
- ・ずっと後に引く、示唆のある余韻にこそ意味があると思います。

・朗読してみたら、その人がよく表れて面白かった。

- ・朗読ははじめ恥ずかしかったけど、読んでいるうちに面白くなってきた。もう少し続けたら本当に演劇っぽくなってもっと面白くなると思った。
- ・朗読の際、横山先生の太鼓の間の入れ方に感動した。演劇の人だなと思った。
- ・初年次教育学会だからこそ、こういった体験型のワークショップが大切。
- ・ぜひうちの大学でも取り入れたいから、来年、もうすこしじっくりやってほしい。
- ・すこし詰め込み過ぎな感じがして、それが残念。もっとじっくりと味わえたらもっと良かったと思う。来年もう一度、ゆっくりやってほしい。